

『阿弥陀經』受容の諸相

——親鸞の理解を中心に——

龍 口 恭 子

一 問題の所在

親鸞は『教行信証』において、浄土三部經、即ち『無量壽經』『觀無量壽經』『阿弥陀經』^①を正依の經典として、この三經はそれぞれに存在意義を持ちつつ、不可分の關係をなすとし、就中『無量壽經』を理論的支柱として、他力名念仏の思想を展開して行く。

しかしこの三つの經典が成立の時代・場所を異にし、受容の過程においても必ずしも同一の軌跡をたどったものでないことは、今日の文献批判において明らかである。

本稿は三經の内の『阿弥陀經』を取り上げ、主として平安時代における受容の諸相を俯瞰しつつ、親鸞の『阿弥陀經』の受容と比較することによって、親鸞の思想の特色、乃至は独自性について考えて行こうとするものである。

さて本論は従来の平安仏教の理解についての再検討への試論を意味するものである。平安仏教は最澄・空海という二

人の宗教的天才を生み出した。両者が構築した教義、或いは宗派仏教が以後の日本仏教を大きく左右したことは疑いのないところであるが、さらにもっと一般庶民、天皇も含めた在家信者を中心とした仏教信仰の流れを詳細に見直す必要があるのではないかと思う。このような視点から平安仏教を分析し、平安仏教の超克を試みた親鸞の立場と照らし合わせる時、親鸞の思想の特殊性がより明らかになるのではあるまいか。

二 『阿弥陀經』の成立と伝播

『阿弥陀經』の成立と伝播の比定についてはいくつかの説があるが、紀元前西北インドという点では諸説一致をみている。『阿弥陀經』信仰の隆盛は、例えば、敦煌よりの大量の書写經典の発見や、中国・韓国における浄土教系諸師のみならず、聖道系諸師による『阿弥陀經』注釈書が存在等によっても伺える。僧伝類にも『阿弥陀經』の書写・誦誦・講説に関する記述が見え、中でも唐の善導は『阿弥陀經』の鼓吹者

として知られるが『法事讃』には彼の『阿弥陀経』理解が端的に示されている。

我が国には七世紀飛鳥時代に将来され、正倉院文書には多数の『阿弥陀経』書写の記録が見える。

三 「三種法華」における『阿弥陀経』

平安時代における『阿弥陀経』の受容の一つとして、特徴的なものに「三種法華」がある。「三種法華」とは『法華経』『般若心経』『阿弥陀経』の三経を一具のものとして尊崇するもので、この三経の書写・読誦・講経は平安時代初期より行なわれ、平安時代末期に最盛期に達した。これについて既に別稿で述べたが、全く別系統と見えるこの三経典が一つのものとして扱われたのは、この三つが合わさって「過去の滅罪」「即身成仏」（または「現世利益」「来世の往生」の経典としての意味を持つものであったからである。

即ちこの信仰は「三種法華」の経典を多量に読誦・書写し、またこれを講じて多数の人の前で講讃することを以て、過去の罪を滅し、現世での成仏、或いは利益を願い、さらに作善の功德によって来世の往生を願うものであった。

さて「三種法華」は中古天台の流れを汲む信仰形態と考えられるが、その受容の広がりを見ると『法華経』『般若心経』『阿弥陀経』の三経を一具とする信仰は天台宗という枠を越

えて、広く受け入れられたのではないかと考えられる。例えば真言宗仁和寺の守覚法親王関係の資料⁽³⁾においても多くの例が見られ、また天仁元年における講経の聞き書きである『法華百座聞書抄』もこの「三種法華」が講讃の対象となっている。ここで注目すべきは、この百日間の説法は十日ごとに異なった講師によって行われたとみられるが、講師の所属をみると、南都北嶺の各派にわたること、つまりこの信仰は天台宗一派のみでなく当時の一般的な信仰の対象であったと考えられるのである。

では「三種法華」の中で『阿弥陀経』はいかなる役割・意義を持ったのであろうか。過去・現在・未来の三世にわたる因果の道理によって、罪障を滅し、来世の往生を目的とするこの信仰にあつて、『阿弥陀経』に述べられた極楽世界の様相は来るべき世を詳述して欣求させる対象であった。その為にはあたら限り多数の念仏とそれを助ける作善とによって、罪障を償い、極楽往生をより確かなものとすることを勧めるための役目を果たしたのである。

四 親鸞における『阿弥陀経』の理解

しかるに親鸞の『阿弥陀経』の理解はこれとは異なる。先学の研究によって明らかにされている如く、「浄土三部経」としての三経の称揚は親鸞の創始ではない。法然の『選択集』

では「三經一論これなり」と謳い、遑れば源信にも三經の称場は見られ、さらに善導の『觀經疏』に正行として三經を一心に読誦することを勧めている。このような浄土教系諸師の三經を一つのものとしみなす思想の流れに親鸞も沿ったことは認められるが、親鸞自身の理解の特色は那邊に存するであろうか。『教行信証』化身土巻に三經隱顯の思想は展開されている。そこでは『阿弥陀經』は『無量壽經』に説く第二十願に相当せしめられ、弘願に入る方便の門とみなされている。また『浄土和讃』『小經』においては、念仏の衆生を諸仏が護念し、勸信の經典としての意味が与えられている。

五 親鸞思想の特色

かかる親鸞の『阿弥陀經』の理解と、先の「三種法華」の思想とを対照して、その相違点を考えたと次のような点において両者が根本的に異なることが指摘できるであろう。即ち①功德回向について②滅罪性について③指方立相についての三点である。

①において「三種法華」では、三經の読誦・書写・講説を多数行なうことによって功德の増大をはかり、利益を期待するが、親鸞はこれを自力の行として否定し、弥陀回向の念仏と見る。②において「三種法華」は、三經を持つことに滅罪の功德を期待するが、親鸞の場合には三經執持によっても覆

いきれない凡夫の罪業の深さの内省とその凡夫を救う弥陀の慈悲への随順という転換がある。また③においては「三種法華」では阿弥陀仏の浄土は欣求すべき他方世界であるのに対し、『教行信証』真仏土巻において浄土はただ無量の光明と寿命に満ちた世界として表され、阿弥陀如来の無限の働きの象徴としてのみ捉えられている。

以上のような「三種法華」との対照によって、親鸞の徹底した念仏信仰が明確になるのではないかと思う。

1 本稿では鳩摩羅什訳をいう。外に玄奘訳『称讃浄土仏撰受經』があるがその受容については稿を改めて述べたい。

2 拙稿『法華百座聞書抄』をめぐる基礎的研究(その二)——講説された三種の經典を中心に——(『仏教文学』第五号)

3 仁和寺紺表紙小双紙研究会編『守覚法親王の儀礼世界』勉強社参照。

〈キーワード〉阿弥陀經、三種法華、滅罪、功德

(龍谷大学大学院)